

中央アジア絨毯に関する先行研究レビュー ——「ウズベク絨毯」をめぐる——

志田 夏美*

A Survey of Previous Studies on Carpets / Rugs of Central Asia:
Concerning “Uzbek” Carpets / Rugs

SHIDA Natsumi

The Uzbeks, the main ethnic group of Uzbekistan, are characterized as “Turkic settled people.” However, there are pastoralists among the Uzbeks who make their cattle raising. Carpets / rugs woven by pastoralists are recognized as a tradition of nomadic culture. In the context of Uzbek nationalism, which disregards the existence of pastoralists, how are “nomadic culture,” “national culture,” and “tradition” regarded? In this paper, I will review previous studies on Central Asian carpets / rugs, including “Uzbek” carpets / rugs.

Studies of Central Asian carpets / rugs began in the late 19th century. The researchers were mainly Russians. Their main interest was in the origin of Turkmen carpets / rugs and pile-weaving. Uzbeks, who have more varieties of pile-less carpets / rugs (*palas*) than other Central Asian ethnic groups, were not of interest to them. It seems that Central Asian carpets / rugs were a tool to “reveal the origin of the ethnos.” As a future research question, I propose to reconsider the limitations of Soviet ethnography, which was reformulated to conform to the socialist ideology based on progressive view of history. And I will discuss the construction process of “Uzbek” carpets / rugs as “national culture” that has continued since the Soviet period.

I. はじめに

本稿の目的は、ウズベキスタンの伝統手工芸の一つである「ウズベク絨毯」について、中央アジア絨毯に関する先行研究を概観し、今後の研究課題／展望を示すことにある。

I-1. ウズベク牧畜民という存在

旧ソ連領中央アジア5か国の中南部に位置するウズベキスタン共和国(以下、ウズベキスタン)には、様々な民族が暮らしている。「ウズベク人の国」を意味する国名の通り、ウズベキスタンの主幹民族はウズベク人である。その民族別人口構成は共和国全体の83.8%を占める¹⁾。ウズベク人は、一般に「テュルク系ムスリム定住民」と特徴づけられている。

「ウズベキスタン」という領域、ならびに「ウズベク人」という民族が誕生した契機は、1924～25年の「中央アジア民族・共和国境界画定」²⁾というソ連体制下の政策過程にある。これは、ソ連成立期に存在していた、現在とは異なる中央アジアの境界線を民族別に引き直すものであった。と

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 独立以降、民族別人口統計の数字は公表されていない。この数字は、Central Intelligence Agency (CIA) 刊行の *The World Fact Book* による2017年推定のもの [CIA 2021(24 Aug)]。

2) この民族政策に対する学術的見解は、次に示す通りである。すなわち、「ロシア革命の民族自決の理念とソ連的な民族理論を中央アジアで体現させると同時に、社会主義建設にとって効率のよい規模に、しかも革命的かつ進歩的な意味を持たせながら、領域を再編成する試み」[帯谷 2018: 90] とみなされている。

はいうものの、その「民族」はアプリアリに定まっていたわけではない[帯谷 2018: 91]。

たとえば、小松久男はソヴィエト民族学者のカルムィシェヴァ (B. Kh. Karmysheva) を引いて次のように要約する。「このとき [= 民族・共和国境界画定]³⁾ にウズベク人として分類された人々は、大別すると3つの要素から成っていた。第一はときにはサルトともよばれた部族的な伝統をもたないトルコ系の定住民 (自称はチャガタイなど)、第二は古来のトルコ系諸部族とモンゴルの侵入期にこの地域に入ったトルコ-モンゴル系諸部族の末裔で、定住民とは交わらずに半遊牧的な生活様式や氏族・部族的な区分をなお保持しているモゴールなどの諸集団、第三は15世紀末にキプチャク草原からトルキスタンへ移動、定着したマンギトやコングラトなどのウズベク諸部族の末裔である。各要素の中でもさらに細分化していた人々の間に民族的な帰属意識はきわめて希薄であり、ウズベクという名称も、本来は第三の集団にたいする総称にすぎなかった」[小松 1995: 263; Karmysheva 1976: 66-67]。

同じく、中央アジアの民族事情に詳しいトガン (Ahmet Zeki Velidi Togan, 1890-1970) を引いて次のように要約する。「ウズベク人は革命期に至るまで共通の自称をもたず、遊牧民であるか、それとも定住民であるかが自他を区別する第一の指標であった。自称として存在したのは、バルラスやカウチンなどの所属する部族名、あるいはタシュケント人やコーカンド人など居住する都市や地方の名にちなんだ呼称であった」[小松 1996: 244; Togan 1928: 606]。

この遊牧民か定住民かという「第一の指標」が現代にも通用するものであることを、2009～11年にウズベキスタン南部牧畜地域にて長期フィールドワークを行った宗野ふもとの報告は示唆している。それによれば、現代のウズベク人の中には3つのグループが存在し、現地の人々は、都市住民を「町 shahar /u⁴⁾」の人々、農耕民を「村 qishloq /u」の人々、牧畜民を「荒野 dasht /u」の人々、と認識している。そのうち、絨毯生産に従事するのはヒツジをたくさん所有する「荒野の人々」、つまり牧畜民なのである [宗野 2015b: 29-30]。

ソ連時代の中央アジアでは、集団化政策の一環で遊牧民ないし半遊牧民の強制的定住化が実施された。ゆえに本稿においては、定住化以後の家畜飼育に従事する人々を「牧畜民」と称するが、彼／彼女らが遊牧民 (半遊牧民) と連続する集団であることに留意したい。牧畜民の多くは現在も血縁関係を重要視し、部族の系譜を記憶によって伝えている⁵⁾。

以上のように、「テュルク系定住民」と位置づけられるウズベク民族の中には「遊牧文化」を保持する「牧畜民」が存在することがわかる。そして、この牧畜民の女性が本研究対象である絨毯の作り手なのである。

I-2. 「ウズベク絨毯」の研究意義

ウズベキスタンの領域で絨毯織りに従事する民族には、ウズベク人に限らず、カラカルパク人や

3) 引用文中の〔 〕は、筆者による補足。以下、同様。

4) 原語表記にあたっては、『中央ユーラシアを知る事典』の「翻字・アルファベット表」[小松ほか 2005: 592-593]にしたがった。なお、原語はウズベク語かロシア語のいずれかである。前者には「/u」、後者には「/r」を原綴りの後ろに付した。

5) たとえば、テュルク系遊牧民に伝わる口頭伝承を研究する坂井弘紀によれば、「中央アジアには系譜を意味するシェジレ (シェジェレ) といわれるジャンルの口頭伝承がある。シェジレは、ハンの系譜や集団の系譜、その人自身の系譜などいくつもの種類があり、祖先崇拜を背景に、彼らのアイデンティティに不可欠な知識として代々語り伝えられてきた」ものである [坂井 2002: 8]。

アラブ人⁶⁾、トルクメン人、キルギズ人⁷⁾、カザフ人、タジク人などがある。本稿では、先行研究にならって、ウズベキスタンの領域で作られる絨毯を「ウズベキスタンの絨毯 *kovry Uzbekistana /r*」と総称する。一方、本研究対象である「ウズベク絨毯 *uzbekskie kovry /r*」は、ウズベク人が作った絨毯という意味で用いる [Gyul' 2019: 7]。

ウズベキスタンの絨毯は、深い色彩によるデザイン装飾を特徴とし、他地域で生産されたものと比べて、染色技術と品質の点で高く評価されてきた。しかし、中央アジア絨毯の中で最も名高いトルクメン絨毯と比べて、消費者にも研究者にもその知名度は低い。ウズベキスタン絨毯研究の第一人者である現地研究者のギュリ (E. F. Gyul') は、その原因として次の2点をあげる。①絹織物や刺繍、金刺繍、プリント織物など定住農耕民(都市・村)の手工芸品に関心が集中してきたこと、②19世紀にかけては半遊牧生活の伝統を保つ牧畜民の間に絨毯織りが存在したが、それらは家での使用や流通範囲の狭くない市場に向けて作られたことである。ウズベク絨毯は品質的に高いものの、比較的素朴なためか、十分に研究されてこなかったのである [Gyul' 2019: 6]。

しかしながら近年のウズベキスタンでは、絨毯を民族工芸として商品化しようという動きがみられ始めた。同国は、2020年6月26日に「共和国における手織り絨毯生産分野の発展のための措置 *Omerakh po razvitiyu v respublike otrasli ruchnogo kovrotkachestva /r*」と題する大統領令 4759号を發布した。以下に冒頭文を記す。

われわれの先祖より代々伝わる古来の遺産として歴史的伝統を具現化している、シルクやウールでできた手織り絨毯の生産分野を含めた、民族工芸という国の手工業の発展のために、さらには、当該分野への幅広い支援を通じて、失業者、特に若者や女性、低所得の家庭への雇用を確保するという市場の要求に対して、固有の芸術的作品である絨毯を適応するために、以下の手続きに従って施行する……

[Postanovleniya Prezidenta Respubliki Uzbekistan No. PP-4759]

後文には、20の具体的な手続きと付録(2017年3月29日付の大統領令 2856号への追加・修正)がつづく。手続きの内容としては、メリノ羊やアンゴラ山羊を飼育する畜産農家や起業家への経済的支援や、「ウズベクイパクスノアト協会 *Assotsiatsii "Uzbekipaksanoat" /r*」による獣医学・家畜開発プロジェクト等の承認、手織り絨毯輸出時の関税撤廃への働きかけのほかに、「国際手織りオリエンタル絨毯フェスティバル *Mezhdunarodnogo festivalya vostochnykh kovrov ruchnoi raboty /r (Hand-made Oriental Carpets)*」を隔年10月にタシュケントで開催すること等が含まれる [Postanovleniya Prezidenta Respubliki Uzbekistan No. PP-4759]。

つまりは手織り絨毯産業への支援を通じて、国内の失業者への対策を講じるとともに海外市場への参入を目論んでいるようである。私見だが、こうした政府主導の伝統工芸支援においては、政治イデオロギー的要素を多分に含んだ「伝統」や「民族文化」の形が表れやすいと考える。ゆえに「ウズベク絨毯」の研究は、ウズベク・ナショナリズムの問題を解明する糸口となる可能性がある。ウズベク民族に対する公式見解「ウズベク＝定住民」像の中で捨象されてきた牧畜民の文化が、「伝

6) ウズベキスタン南部には、アラブを自称する人々が居住している。彼らは、7世紀末から中央アジアの南部オアシス地域を征服したアラブ・ムスリムの末裔、あるいは17世紀末にアフガニスタン北部および現タジキスタンのヒサル地方からカシュカダリヤに移住してきた遊牧アラブの後裔である [小松 2005: 33]。

7) 本稿では原文に従って「キルギズ *kirgiz*」と記すが、これは現在のクルグズスタン共和国の主要民族であるクルグズ人と同一の集団を指している。以下、同様。

統」的な「民族文化」としてどのように再構築されていくのか。この問いに答えるために、まずは「ウズベク絨毯」の構築過程を確認する準備として、中央アジア絨毯に関する先行研究を概観する。

I-3. 本稿の構成

構成としては、はじめに絨毯に関する基礎的知識をまとめた上で、先行研究を概観する。中央アジア絨毯の基本文献であるモシコヴァの先行研究史 [Moshkova 1970] に基づき、「ロシア革命以前」と「ソヴィエト期」の時代区分を設け、時系列順に記載する。3区分目の「ポスト・ソヴィエト期」は、ギユリ [Gyul' 2019] を参考に筆者が補足した部分である。最後に、先行研究における問題点を示し、今後の研究課題と展望を述べる。

II. 絨毯に関する基礎的知識

II-1. 定義と種類

本研究の対象である「絨毯 *carpets / rugs*⁸⁾」という語句には、多種多様な形状の製品が含まれる。本稿ではさしあたり、主に動物性繊維でできた敷物等に用いる織物を指してこの語句を用いる。絨毯織りによって作られるのは、床に敷いたり壁に飾ったりする一枚布の製品だけでなく、小さな袋物やサドルバック、天幕ベルト等あらかじめ用途の定まった製品もある。原料に関しても、ヒツジやヤギ、ラクダなど家畜動物の毛を用いることが一般的だが、綿や絹、麻などの植物性繊維を用いることもある。織り技術に関しては大別して2種類の技法がある。第一は、一般に狭義の絨毯を指す起毛織りで、緯糸を渡す際に経糸にパイル糸を結びつけて織る技法である。染色したパイル糸によって図柄を表現する。第二は、経糸と緯糸のみで構成される平織り(キリム *kilim*⁹⁾)で、結びのない複数の技法の総称である。基本的には、染色した経糸か緯糸によって図柄を表現する。以上2種類の技法を紹介したが、複数の技法を組み合わせると一つの製品が作られることもしばしばある。その他に、広義の絨毯にはフェルトを含む場合がある。フェルトは、織機を使用せずに縮絨によって繊維を絡ませる、羊毛の特性を活かした技法である。染色した羊毛を配置して縮絨するか、色違いのフェルトをアプリケのように嵌めて縫い合わせることで図柄を表現する。中央アジアでは、後者の技法が一般的である。

ウズベキスタンでは、絨毯を総称して「ギラム *gilam / u*」という¹⁰⁾。ただし、起毛絨毯のパイル糸の長さによって2種類の呼び分けがある。他地域でも見られる標準的な長さの起毛絨毯(「短いパイルの絨毯 *korotkovorsovye kovry / r*」)が狭義のギラム、長く毛足を残した起毛絨毯(「長いパイルの絨毯 *dlinnovorsovye kovry / r*」)が「ジュルフルス *jurxurs / u*」である。また平織りも技法によって数種の呼び分けがあるが、起毛のない絨毯を総称して「パラス *palas / u*」と呼ぶ。他に、婚礼の際の壁掛けに使用される「刺繍の絨毯 *vyshitye kovry / r*」もあり、「エンリ・ギラム *enli gilam / u* (幅広の絨毯)」や「キズ・ギラム *qiz gilam / u* (娘の絨毯)」などと呼ぶ。ウズベク牧畜民は、他の民族部族と比べて、パラスの製織方法の種類を最も豊富に継承することがわかっている [Gyul' 2019: 121-154]。

8) *carpet* と *rug* については厳密な区分があるわけではないが、大きさによって呼び分けられるのが一般的である。後者の方が小さく、敷物以外の製品の呼称としても用いられる。本稿では、製品よりも織りの技術が問題となるため、いずれの形状も含むことを意味して「*carpets / rugs*」で統一している。

9) 本来は、平織りを意味するトルコ語だが、今や絨毯研究において一般的用語となっている。詳しい技法については [Balpınar 1982] を参照されたい。

10) ウズベキスタン中部に位置するヌラタのウズベク・トゥルクマン部族の間では、ギラムの他に「ハリ *xali / u*」も用いられる [Moshkova et al. 1996: 54]。これは、アナトリアやアゼルバイジャンで用いられる「ハリ *hali*」と語源を同じくする。

II-2. 生産地

手織り絨毯の主要な産地は、イラン、アナトリア(トルコ)、コーカサス、東トルキスタン(現在の中国新疆ウイグル自治区)を含む中央アジアである。これらの地域は、乾燥と寒暖差が激しい内陸性気候に位置する。農耕に適さない環境では、主に厳しい気候にも適応できるヤギやヒツジが飼育されるため、絨毯に適した羊毛が潤沢に供給される。それゆえ、ヒツジの飼育地域と絨毯の生産地は重なっている [杉村 1995: 8-9]。

絨毯織り技術の起源と同じく、遊牧の起源は定かでない。「野生動物群との共生」を起点に遊牧の起源を探求する松原正毅は¹¹⁾、西アジアや中央アジアに棲息していたヤギやヒツジと遭遇した現生人類が、長い時間をかけて野生動物群と共生関係を築き、搾乳をはじめたことが遊牧の起源であると考えている¹²⁾。時期については、スペンサー・ウェルズ説 [ウェルズ 2007] を前提として、現生人類がアフリカ大陸から西アジアを越えて中央アジアに到達した約4万5000年前から1万年前後が経過した時期と推定している [松原 2021: 128-140]¹³⁾。一方、西アジアおよび中央アジアにおける織物の歴史は、「人類が農耕牧畜経済に移行した紀元前7000~6000年頃に、太古から生息していた野生のヒツジやヤギの毛を紡いで非常に単純な方法で織ったのが初め」と考えられている [杉村 1995: 114]。

II-3. 研究資料

絨毯を研究するにあたっては、主に2種類の資料が用いられてきた。一つは考古遺物を含む標本資料、もう一つは絵画や挿絵を含む文献資料である。

現存する最古の絨毯として知られる標本は、シベリア南部バジリク渓谷にあるノイン・ウラ遺跡第5号墓より1949年に出土した、推定紀元前4世紀頃のものである。現在はエルミタージュ美術館(サンクトペテルブルグ)に所蔵されている [鎌田 2016: 22; 杉村 1995: 117]。

文献資料としては、古代期はギリシア語やラテン語、中国語の歴史文献、10世紀以降はアラビア語やペルシア語の歴史文献に描写されることがあった。中央アジア絨毯研究の第一人者であるモシコヴァ (V. G. Moshkova) によれば、13世紀に書かれたマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) の日記には、トルクメン人の絨毯製品についての記述がある。「トルクメンは……牧畜に従事する……おそらく、世界で最も美しく洗練された絨毯をつくりあげる……」¹⁴⁾。モンゴル襲来とその後の衰退期に入った14世紀の歴史文献には、絨毯織りに関する記述は乏しい。さらに、こ

11) 遊牧の起源を野生動物群との共生、すなわち動物の家畜化以前にみることを最初期に提唱したのは、今西錦司と梅棹忠夫である [今西 1948; 梅棹 1976]。アジア各地の遊牧民のもとで現地調査を実施してきた松原は、今西・梅棹説をさらに深めるかたちで遊牧の起源の時期について考察している。

12) 松原は「搾乳の技術が遊牧の起源と連動しているのに対し、去勢の導入が家畜化の強化と深くかかわっている」とし、後者は前者に比べて新しい技術であるとみなしている [松原 2021: 152]。

13) 従来、ヤギやヒツジの家畜化は考古学的資料を根拠に紀元前1万年頃と考えられてきた。これに対し、松原は「考古学的発掘の対象となっているのは、年代をこえて堆積した定住者による遺構がほとんど」であることを指摘している [松原 2021: 154]。

14) モシコヴァの使用したロシア語訳 [Polo 1955: 56] を確認すると、彼女の引用が曲解であることがわかった。正しくは、

「トゥルコマニアの住民は三種類からなる。第一は、マホメットを信じその教法に従うトゥルコマン人で、耳なれない言語を使う単純な民である。彼らの生業は牧畜であるから、山間であれ平地であれ、いやしくも好適な牧地のある所ならどこでも居住する。トゥルコマン種といわれる良馬や高価でりっぱなラバを産する。トゥルコマン人以外の二種類は、アルメニア人及びこれと雑居して都市・集落に住むギリシア人で、ともに商業や手工業に従事する。世界でも無比に美しい絨緞や、深紅色そのほか色とりどりの高級絹布、そのほか種々な産物がある」 [ポーロ (愛宕訳) 1970: 38-39]。

モシコヴァは、アルメニア人とギリシア人の説明を省略することで、トルクメン人が美しい絨毯を織るのかのように引用している。

の時期に中央アジアに定着したテュルク・モンゴル系の出自の人々は、おそらく起毛織りの技能を有していなかった。テュルク・モンゴル民族の経済・生活環境を記述したルブルク (Guillaume Rubruquis, 1220?-93?) とプラノ・カルピニ (Giovanni dal Piano dei Carpini, 1182?-1252) の著作には、起毛絨毯についての言及はどこにもなく、刺繍やアップリケで装飾するフェルトの言及が頻繁に登場する [Moshkova 1970: 12]^{15) 16)}。

モシュコヴァによれば、「トルコ人の絨毯 *turetskii kover /r*」という語が歴史資料に初めて登場するのは17世紀のことであり、その真意は明らかでないが、おそらく歴史資料にある「トルコ人 *turetskii /r*」とは「オスマン帝国のトルコ人 *osmanskii turok /r*」ではなく、「中央アジアのテュルク民族 *sredneaziatskii tyurkskii narod /r*」だろう、と推測する [Moshkova 1970: 12]。

18～19世紀はじめのロシアの歴史資料は、現在のウズベキスタンの領域内で絨毯織りが大きく発展した地域についての情報を含んでおらず、中央アジア学術調査にきたロシア軍将校のメモや記事には、ハンヤベクの住処に関する記述のもとでのみ絨毯に関する言及がある。19世紀終わりから20世紀はじめに西ヨーロッパの言語で出版された東洋諸国の絨毯織りに関する記述においても、中央アジアの絨毯についてはほぼ触れられないか、触れられてもとても短いものだった [Moshkova 1970: 12]。

III. 中央アジア絨毯研究史

III-1. ロシア革命期以前

中央アジア諸民族の絨毯織りに関する研究は、19世紀半ばのロシア語文献からはじまる。資料としては、旅人や商人、中央アジアのロシア政府大使館の成員、軍事遠征の関係者の短い報告やメモであった。当時、絨毯を生産地域や芸術様式によって分類した目録がつくられたが、時に矛盾すら生じるほどの誤りがあった。

帝政ロシアの研究者は、1854～80年の中央アジア併合のプロセスの後、この地域の民族の歴史や生業を研究しはじめた。専門調査の資料に基づく詳細な情報は、印刷物として出版されるようになった。なかでも民族手工芸は、ロシア社会から高い注目を集めた。現地の地方行政とロシア中央当局は、ロシアの商業的・工業的資金力を示すために積極的に文献を出版し、様々な展覧会を催した。このような背景のもとに、19世紀終わりから民族手工芸と住民の生業(経済)の専門的調査がはじまったのである [Moshkova 1970: 12-13]。

専門調査に基づく著書のなかでも、シマコフ (N. E. Simakov) の編纂による『中央アジアの芸術』 [Simakov 1883] は、絨毯織りを含む中央アジアの装飾芸術の様々な系図を紹介した点で大きな意味をもっていた。50枚¹⁷⁾ のイラストから成るアルバムには10点の絨毯複製が描かれた。そのうち、4～8点がブハラ・ハン国領(アムダリヤ南方¹⁸⁾)の絨毯である。シマコフのアルバムはロシア

15) モシュコヴァの使用した文献 (V. Rubruk, 1911. *Puteshestvie v Vostochnye strany*, trans. A. I. Malein, St. Petersburg; P. Carpini, 1911. *Istoriia mongolov*, trans. A. I. Malein, St. Petersburg.) と同じものは確認できなかったが、1957年のロシア語訳 [Rubruk 1957; Carpini 1957] および邦訳 [カルピニ・ルブルク 1965] を確認したところ、確かに起毛絨毯についての記述はなく、フェルトについてのみ言及があった。

16) これに関してモシュコヴァは次のような推論を行っている。「古代のテュルク・モンゴル民族のなかに起毛織り絨毯の伝統がないことは、当代のテュルク・モンゴル民族の実際の生業管理と一致する。タタルやモンゴル、カラムイク、ハカスその他は、起毛織りを行わない。一方で、トルクメンやウズベク、カザフ、キルギズ、カラカルバクの諸集団は、起毛織りの技能をおそらく中央アジアの先住の牧畜民との融合や結合の過程で習得したようだ」 [Moshkova 1970: 12]。

17) [Moshkova 1970; 1996] では「5」と記されているが、これは誤りである。

18) アムダリヤ(アム川)はパミール高原を源流として、タジキスタン、アフガニスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンの領域を流れる中央アジアの大河である。現在のウズベキスタンの領域は、アムダリヤ右岸(東側)に位置する。

社会で評判となり、コペンハーゲンにおける1888年国際博覧会の成功にもつながった[Moshkova 1970: 13; 1996: 12; Gyul' 2019: 8]。後に、著書のテキストはピナー(R. Pinner)とフランセス(M. Franses)によってロシア語とフランス語で、図表はシマコフによって英語で再版された[Pinner & Franses 1980; Simakoff 1993]。

絨毯織りの研究は、民族手工芸のうちの一つとして視察統計の整理に終始していた。「国家資産省 Ministerstvo gosudarstvennykh imushchestv /r」は、中央アジアの手工芸研究を目的に、1890年にダヴィドヴァ(S. A. Davydova)をタシュケントに派遣したが、彼女の著作『ロシアの手工芸産業』[Davydova 1913]はあまり多くの問題を明らかにしなかった[Moshkova 1970: 13]。

中央アジアの民族や諸部族の絨毯コレクションは、辺境への公用旅行のときに絨毯を入手していた現地政府の代表数人が所有していた。非常に美しい絨毯コレクションは、アレンダレンコ([G. A. ?] Arendarenko)、ミハイロフ([F. A. ?] Mikhailov)、ボゴリュボフ(A. A. Bogolyubov)などの収集品であった。アレンダレンコのコレクションは、パリにおける1900年国際博覧会で展示され、1896～1901年収集のボゴリュボフのコレクションは、数多くのロシア内外の展覧会で展示された[Moshkova 1970: 13]。

ザカスピ州長官だったボゴリュボフは、『中央アジアの絨毯製品』[Bogolyubov 1908-09]を出版した。カラー刷りの豪華なアルバムには、辺境への多数の旅行で集めた個人コレクションの標本イラストが掲載されている。そのほとんどはトルクメン人の絨毯芸術で、のこりはフェルガナ盆地のキルギズ人とアラブ人、ウズベク人という3つの小区分が設けられた。現代のウズベキスタンの領域(アムダリヤ右岸)で作られた絨毯のイラストはあまり多くない。本書には、中央アジアの領域における絨毯織りの拡大図と短い解説文が含まれている[Moshkova 1970: 13; Gyul' 2019: 8]。後に、イギリスの絨毯研究者トンプソン(J. M. A. Thompson)によって英語で再版された[Bogolyubov 1973]。

ボゴリュボフのアルバムは、ロシアに比べて絨毯研究がすすんでいた西ヨーロッパの学術的分類をはじめて導入した点で大きな意義を有するが、不十分な解説文にはいくつかの誤りがあった。東洋学者のセミョーノフ(A. A. Semenov)とヴェセロフスキー(N. I. Veselovskii)からは、装飾芸術の伝播や絨毯の色調、個々の様式の起源の時期などに不正確な点があり、地図に関しても不完全であるとの指摘を受けた[Moshkova 1970: 13-14]。

中央アジアの民族芸術をよく知るセミョーノフの論評「ロシア・トルキスタンの絨毯」[Semenov 1911]の内容は、ボゴリュボフのアルバムが伝える情報にいくつかの追加・修正を加えた。ウズベク人のリストを補足し、サマルカンド州のアラブ人とカラカルバク人のパラスと〔起毛〕絨毯の生産地を正確にした。しかし、その論評のすべてが正確というわけではなかった[Moshkova 1970: 13; Gyul' 2019: 8]。

東洋珍品の愛好家であったブルドゥコフ(N. F. Burdukov)は、中央アジアやイラン、アフガニスタンを旅行し、現地の手仕事を全般的に研究した。入手したテキスタイルは「シュチグリツ男爵学習博物館 Muzeya uchilishcha barona Shtiglitsa /r」で展示され、短い解説と標本イラストを載せた『トルキスタンの絨毯 N. ブルドゥコフのコレクションから』[Burdukov 1904]が出版された[Gyul' 2019: 8]。

中央アジア手工芸の研究者兼画家のドゥーデン(S. M. Dudin)は、中央アジア絨毯研究の礎を築いた人物の一人でもある。彼は、「ロシア博物館 Russkii muzei /r」の民族学部門(現在の「ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学・民族学博物館(クンストカメラ) Muzei antropologii i

etnografii im. Petra Velikogo (Kunstkamera) Rossiiskoi akademii nauk]、以下「ロシア人類学・民族学博物館」と表記)の委託で、考古学学術調査隊員として1900年代に中央アジアへ向かうようになった。そこで絨毯装飾やデザインのスケッチ採集および絨毯コレクションの収集を行った。その成果は、時を置いてロシア革命後に論文「中央アジアの絨毯製品」[Dudin 1928]として世に出た。この著作には、ペルシア絨毯やカフカス絨毯との違いや、トルクメン人、ウズベク人、キルギズ人、それぞれの芸術的特徴や品質の評価と染色に関する詳細な情報が含まれる。ドゥーゼンのウズベク絨毯の分類には、カタガン、クングラト [= コングラト]、ラカイ、マンギト、サマルカンド州に暮らすウズベク氏族集団の絨毯が含まれている。ただし、彼の関心は主にトルクメン絨毯に注がれ、ウズベク絨毯はおろかウズベキスタンの絨毯にもわずかな紙幅しか与えられなかった。また中央アジアの絨毯織り地域のすべてに訪れることができなかったため、個々の特徴の記述や定義に誤りがある。たとえば、サマルカンドのカラカルパク人とカシュカダリヤの(カルシ karshinskii と呼ばれる)草原や、バシール bashirskii [草原]、クイズィル・アヤク kyzyl-ayakskii [草原]のアラブ人の製品もウズベク群に分類し、フェルガナ盆地や東トルキスタンの諸地域のキルギズの製品を同じキルギズ群としてまとめてしまっている [Moshkova 1970: 14–15; Gyul' 2019: 8–9]。なお、ドゥーゼンの中央アジア学術調査に関する報告と写真は近年、ロシア人類学・民族学博物館から刊行された [Emel'yanenko (ed.) 2021]。

エルミタージュ皇帝宝物館の館長(後のエルミタージュ支配人)のフェリケルザム(A. F. Fel'kerzam)男爵は、中央アジアの絨毯織りの発展の解明に大いに貢献した人物である。彼は、中央アジアを直接めぐる機会には恵まれなかったが、首都[ペテルブルグ]の博物館に所蔵されている中央アジアの大コレクションを分析し、ロシア語や西ヨーロッパの言語で出版された絨毯関連の文献やドゥーゼンによる調査資料を研究した。最終的に、フェリケルザムは『中央アジアの古代絨毯』[Fel'kerzam 1915]という労作を生んだ。中央アジア絨毯のなかでもトルクメン人やキルギズ人、ウズベク人の遊牧諸集団に注目し、特にフェルガナ盆地のキルギズの絨毯をかなり詳細に記述した。20世紀はじめに極めて大きな商業価値をもっていた東トルキスタンで作られた「カシュガル Kashgar」絨毯に関する新しい情報の他に、アフガン人の絨毯や北部ペルシアやベルジスタン Beludzhistan/r¹⁹⁾の絨毯の情報を加えた。ウズベク人の絨毯については、作り手が遊牧民であるものと定住民であるものに区分し、前者のカテゴリーにはザラフシャン渓谷のキプチャク、クングラト [= コングラト]、カラカルパク、ラカイの部族による区分を設けた。とはいえ、この著作にも欠点があり、アマダリヤ地方で作られた絨毯の特徴について、ボゴリュボフと同じ誤りを繰り返したり、装飾の要素の意味を決めるキルギズ語の翻訳に誤りが生じたりした [Moshkova 1970: 14; Gyul' 2019: 9]。

ロシア語の研究以外では、ウズベク人の織物や刺繍、絨毯の豪華な標本コレクションを所有するドイツにおいても、いくつかの著作が出版されている。筆者の言語的制約から本稿では扱えないが、ギュリによれば、中央アジア絨毯の研究に際してヨーロッパでは主に流通品が扱われており、それらは販売地の名称を冠して流通していたために、作り手の属性情報の記述に混乱がみられるという。たとえば、古くから中央アジア絨毯市場の中心地であった都市名を冠した「ブハラ絨毯」の中には、様々な地域で様々な民族部族によって作られた絨毯が含まれ、必ずしもウズベキスタンの絨毯を指すわけではなかった [Gyul' 2019: 9–10; Gyul n.d.: 50–51]。

19) バルチスタンのこと。バルチ(ペルージ)人は、パキスタンやイラン、アフガニスタン、トルクメニスタン等に居住している [シンガー編 1979: 140–141]。

III-2. ソヴィエト期の絨毯研究

ロシア10月革命(1917年)の後に、民族手工芸の組織形態や学術調査の中心地にも変容が生じた。中央アジア諸国の民族政策によって、民族文化の表象に対する研究関心が高まり、全民族共和国において手工芸の研究が始められた。ソヴィエト期の手工芸研究における主要な研究課題は、生産の同時代的状況を明らかにすることであった。

1920年代にアンドレエフ(M. S. Andreev)やガヴリロフ(M. F. Gavrilov)によって実施された現地の芸術テキスタイル(刺繍、織物、フェルト、パラス、〔起毛〕絨毯)の装飾に関する現地調査とその民族誌が有する理論的意義は大きかった。彼らの行った熟練工の製作現場へ直接赴く民族誌学的調査方法はすこぶる有益なものであり、熟練工が使用する多くの装飾モチーフには、具象的なものに関連する名称がつけられていることが明らかとなった。また、現地調査に基づく資料データは、ドゥーゼンやフェリケルザムのような20世紀はじめのロシア人研究者の民族装飾の図表に関する考察の正しさを証明した[Moshkova 1970: 14–15]。ウズベキスタンの領域に関する著作としては、アンドレエフの「1921年におけるサマルカンド州への民族学的現地調査の諸成果」[Andreev 1924]、ガヴリロフの「ミリヤバド村のウズベク女性の機織り技能」[Gavrilov 1927]がある。

ソヴィエト期には、中央アジアの装飾芸術や手工芸の全般的研究の傍らで、絨毯織りの研究も本格化した。特にセミョーノフの『アジアの絨毯織物に関する文献案内』[Semenov 1925]²⁰⁾とドゥーゼンの著作[Dudin 1928]がきっかけとなり、ロシア語の絨毯文献はかなり充実するようになった[Moshkova 1970: 15]。

ただし、ここまでの研究者はほぼトルクメン絨毯に関心を寄せていた。そんな中、本格的にウズベキスタンの絨毯を研究し始めたのがモシュコヴァであった。彼女の著作は、中央アジア絨毯研究の最も重要な文献の一つでもある。モシュコヴァは、同時代的状況を明らかにするだけでなく革命前の製品との比較によって歴史的状况を探求しようとした。特に19世紀おわりから20世紀はじめの絨毯織りについて詳しく触れ、手工芸の品質や技術を民族別に特徴づけた。本書は、博士論文の執筆途中に亡くなった彼女の死後に出版されたものだが、生前刊行された論文[Moshkova 1946; 1951]を含め、19世紀の伝統を保持する熟練工との交流(主に1929～46年のウズベキスタンとトルクメニスタンへの6度の学術調査の成果)に基づいている。出版準備は、歴史学準博士のモロゾヴァ(A. S. Morozova)とその他の専門家によってすすめられ、モシュコヴァの遺した資料に若干の補足が加えられた[Moshkova 1970: 14–15]。本書は3部から成り、第1部で中央アジアの人々の絨毯織りについての概要、第2部でウズベキスタンの絨毯、第3部でトルクメンの絨毯について記述している。第2部には、主にサマルカンドのウズベク諸集団、ヌラタ山地のウズベク・トゥルクマン、フェルガナ盆地のキルギズ、カルシ草原のアラブの起毛絨毯に関するデータが掲載される。一方、カラカルパキヤやスルハンダリヤの平織絨毯に関しては極めて概観的な情報しかない[Gyul' 2019: 10–11]。後に、アメリカ人絨毯研究者のオバノン(G. W. O'Bannon)らによって英語に翻訳され再版された[Moshkova 1996]。訳書には導入文と各章に解説が追加されたほか、ウズベキスタン共和国立美術館(在タシュケント)、同立歴史博物館(在タシュケント)、同立手工芸博物館(在タシュケント)、ウズベク民族歴史文化博物館(在サマルカンド)、絨毯博物館(在ブハラ)、トルクメニスタン共和国立美術館(在アシュガバード)の所蔵品やモシュコヴァ自らが調査旅行中に買い集めた多数のコレクションのカラー図版が補足された。なお、原書はオンラインでも公開さ

20) 本書はロシア語文献36件に対し、外国語文献164件を含んでいた。

れている²¹⁾。

その他に、ウズベキスタン南部の情報を補足するものとして、次の著作が利用できる。同国南部地域を対象に現地調査を行ったカルムィシエヴァの民族誌『ウズベク農村住民の民族学的概要』[Karmysheva 1969]は、絨毯や刺繍などの手工芸の内容を含んでいる。同じく「ラカイのナプラマチとイルギチ」[Karmysheva 1955]と題する論文は、絨毯生産を主題とするものである。

ギュリによると、ソヴィエト後期から2000年代にかけてファフレツヂノヴァ (D. A. Fakhretdinova) がウズベキスタンの絨毯について検討しているようだが [Gyul' 2019: 11]、宝飾品を扱った著作 [Fakhretdinova 1988] 以外を確認できなかった。

ロシア語以外の文献としては、パーソンズ (R. D. Parsons) の『アフガニスタンの絨毯』[Parsons 1983] にウズベク織物の標本が含まれている [Gyul' 2019: 12]。

III-3. ポスト・ソヴィエト期

中央アジア絨毯に関する外国語文献は、基本的にトルクメン絨毯に関するものが多く、ウズベク絨毯に関する記述は、これまで紹介した文献の引用による概説の域をでない [Gyul' 2019: 11]²²⁾。

1990年代の出版物としては、次のようなものがある。ハーヴェイ (J. Harvey) の『中央アジアの伝統織物』[Harvey 1997] は、ウズベク絨毯の標本図版を含んでいる。彼は、フェルトや絨毯、織物を含む現地のテキスタイルのモチーフの意味や原料、染色などは、遊牧民と定住農耕民の文化的文脈の中で発展したものであるとした [Gyul' 2019: 11]。

1995年にカルター (J. Kalter) とパヴァラ (M. Pavala) は、ウズベキスタン初代大統領イسلام・カリモフ (Islom Abduganiyevich Karimov) 時代に大統領府後援のもと、ベルリン、シュトゥットガルト、ロッテルダムで開催された「シルクロードの継承者——ウズベキスタン Nasledniki Shelkovoogo puti: Uzbekistan」展のカタログを制作した。これには、ドイツのリンデン博物館所蔵コレクションのうち、ラカイの絨毯、フェルガナ盆地のウズベクの起毛や平織りの絨毯、バッグ等の様々なウズベク工芸の標本図版と論文「生活住居とその内装 Zhilye doma i ikh inter'er」が掲載された [Gyul' 2019: 11]。これに関しては、英語での再版がある [Kalter & Pavaloj (eds.)]。

ロシア人類学・民族学博物館の主任研究員で、考古学および民族学的テキスタイルの専門家である歴史学者ツァリョーヴァ (E. G. Tsareva) は、中央ユーラシアのフェルトや織物、絨毯を研究対象としている。中央アジアではカシュカダリヤのアラブ人やアムダリヤ中流域のトルクメン人のもとの学術調査の経験があり、その著作 [Tsareva 2004; 2006; 2007; 2010a; 2010b; 2013a; 2013b; 2015a; 2015b; 2016] は現地調査と博物館所蔵標本の分析に基づくものである。彼女は、古代期の「バクトリア絨毯 baktriiskii kovry /r」など絨毯織りの起源の解明に注力している [Tsareva 2009; 2012]。

ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所の主任研究員で、ウズベキスタン手工芸の専門家である芸術史学者ギュリは、絨毯に関する一連の著作 [Gyul' 2001; 2004; 2005; 2008; 2019] を刊行した。2019年の著作は、ウズベキスタンの様々な地域の絨毯を体系的にまとめたものである。本書は5部から成り、第1部は中央アジアの絨毯織りの歴史、第2部は19～20世紀はじめの絨毯織り、第3部は19～20世紀はじめのウズベク絨毯の芸術と意味、第4部は現代の絨毯織り、第5部

21) <<http://nblib.library.kz/elib/Sait/Sovrem-e knigi/01-01-2017/Moshkova V G Kovry naroda/files/assets/basic-html/page-1.html>>. アクセス時の「Adobe Flash Player プラグインのインストール」要求は無視して閉じることで閲覧できる。

22) たとえば、ワシントンテキスタイル博物館コレクションの中から中央アジアの平織絨毯を紹介した [Landreau & Pickering 1969] など。

は図版という構成となっている。主要生産地として、プハラ・アミール国(サマルカンド州、ヌラタ山間部、アムダリヤ中流域、カシユカダリヤおよびスルハンダリヤ)、ヒヴァ・ハン国(アムダリヤ下流域)、コーカンド・ハン国(フェルガナ盆地)という、前近代にさかのぼった独自の区分を導入した点が特色である。現代的状況についても伝える本書は、本研究にとって最も重要な文献である。とはいえ、ギュリの著作はいずれも日本国内に蔵書がなく、オンライン購入等を含め入手に非常な困難を伴う。筆者は、指導教員の協力のもと現地の知人を介してかろうじて2019年の著作を入手できたが、その他の文献はほとんど入手できていない。さしあたりはインターネット上で部分的に公開されているウェブページ[Gyul' 2019 (13 Mar); Gyul 2011 (5 Oct); 2011 (28 Dec); 2012 (18 Feb)]を閲覧するほかない。

ウズベキスタンのジェンダー規範やバザールについて研究する地域研究者の宗野は、カシユカダリヤ州チラクチ区に長期滞在し、文化人類学的調査を行った。家内工業と工場生産現場における参与観察から、ウズベキスタン女性の日常生活に占める手織り物生産の現況を明らかにした。現地調査に基づく一連の著作[宗野 2014a; 2014b; 2015a; 2015b; 2017; 2019; Sono 2016; 2020]は、ウズベキスタンの絨毯に関する重要な文献であるだけでなく、日常生活の中の絨毯づくりに着目した点で本研究の先をいくものである。

IV. 先行研究の問題点と今後の展望

中央アジア絨毯の先行研究を概観すると、標本収集とその整理のための研究を第一フェーズとして、生産現場の調査へとシフトしつつ、歴史文献や考古遺物との同定に関心が向けられてきたことがわかる。可能な限り古代にさかのぼって記述する方法は、旧ソ連圏の絨毯研究者にも共通しており、ソ連流の学問伝統がソ連解体後もなお踏襲されていることが示唆された。旧ソ連圏の絨毯研究が歴史分野の学者によって進められてきたことも、それをよく表している。このような傾向から、現代の旧ソ連圏の研究をするにあたっては、研究者も含めた現地の人々の社会主義的経験をふまえて分析する必要があるといえる。まずは、ソヴィエト民族学者の研究成果を、ソ連流の学問伝統をふまえた上で中立的な立場から読み直し、ソ連期から続く「民族文化」としての「ウズベク絨毯」の構築過程の考察をすすめたい。

ソ連期までの先行研究は、おおそ芸術性の評価や技術の伝播・発展に主眼を置いており、なかでも起毛織りの起源の解明こそがその中心的課題であったといえる。トルクメン絨毯に最も注目が集まってきた理由はここにあるのだろう。トルクメン絨毯の多くは起毛織りでできており、部族的モチーフが織り込まれている。つまり、芸術的水準を満たし、かつデザインの系譜をたどりやすかったのである。しかし、そもそも芸術性の高い低いは何を根拠に判断されるのだろうか。従来の研究は、芸術的(とすれば市場経済的)に優れているかどうか既製の絨毯を評価することに帰結するか、その価値判断を前提に研究対象を選んできたといえる。多くの研究者が平織り(パラス)よりも起毛織りに関心を寄せてきた事実は、パラスやフェルトが遊牧民の技術として語られてきたことと合わせて考えると、単線的な技術史観ないし進歩史観を前提としてきたからなのかもしれない。本研究では、むしろ市場に出回ることが少なく、もっぱら生活用品として使うために作られるウズベク絨毯に着目することによって、絨毯づくりを日常に埋め込まれた牧畜民の生活技術としてとらえ直したいと考えている。そして、従来の芸術性や市場価値とは異なった、遊牧民の伝統的な知の体系として絨毯づくりを研究することによって、ウズベク人の中にある遊牧文化に光を当てることを展望する。

V. おわりに

本稿では、中央アジア絨毯に関する先行研究を時系列順に概観した。これにより、本研究対象である「ウズベク絨毯」は、中央アジア絨毯の中でもトルクメン人の起毛絨毯に価値を見出してきた研究史においては十分に光があてられてこなかったことが窺えた。

今後はソヴィエト期の研究文献を中立的な立場から読み直し、西側の文化人類学的知見からソヴィエト民族学を対照化することを目指すと同時に、ウズベク牧畜民のもとでの参与観察によって内側の視点にも触れていきたい。「ウズベク絨毯」なるものがソ連の学者によって、いかに構築されてきたのか。そこに政治イデオロギーはいかに関わってくるのか。そして、「遊牧文化」に由来する絨毯が国外に向けて「民族文化」としてアピールされるときに、定住民像を打ちだす現代のウズベク・ナショナリズムの中で「自民族らしさ」や「伝統」はどのように再構築されるのか、それに現地の人々はどのように向き合うのか、といった点を考察していきたい。

参考文献

i) 日本語文献

a. 単行本

今西錦司 1948 『遊牧論そのほか』 秋田屋.

梅棹忠夫 1976 『狩猟と遊牧の世界』 講談社.

鎌田由美子 2016 『絨毯が結ぶ世界』 名古屋大学出版会.

小松久男 1996 『革命の中央アジア——あるジャディードの肖像』 東京大学出版会.

小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹(編) 2005 『中央ユーラシアを知る事典』 平凡社.

坂井弘紀 2002 『中央アジアの英雄叙事詩』(ユーラシア・ブックレット 35) 東洋書店.

シンガー, アンドレ(編) 1979 『世界の民族 15——中央アジア・西アジア』(松原正毅監修 高部義信・東徹訳) 平凡社.

杉村棟 1995 『絨毯——シルクロードの華——群馬県立歴史博物館第 50 回企画展』 朝日新聞社.

宗野ふもと 2009 『現代中央アジアにおける女性の仕事——ウズベキスタン、ホラズム州ヒヴァ市の絨毯工房を取り上げて』(Kyoto Working Papers on Area Studies: G-COE Series 55). [online] <<http://hdl.handle.net/2433/155769>>.

松原正毅 2021 『遊牧の人類史——構造とその起源』 岩波書店.

b. 論文

帯谷知可 2018 「第 12 章 ソ連体制下のウズベキスタンの成立——中央アジア民族・境界画定」 帯谷知可(編) 『ウズベキスタンを知るための 60 章』 明石書店, pp. 90–94.

小松久男 1995 「9 章 二つの都市のタジク人——中央アジアの民族間関係」 原暉之・山内昌之(編) 『スラブの民族』(講座スラブの世界 2) 弘文堂, pp. 250–274.

—— 2005 「アラブ人」 小松久男ほか(編) 『中央ユーラシアを知る事典』 平凡社, pp. 33–34.

宗野ふもと 2014a 「合い間の仕事としての手織り物生産——ウズベキスタンにおける社会変容と女性」 『アジア・アフリカ地域研究』 13(2), pp. 212–248. [online] <<https://doi.org/10.14956/asafas.13.212>>.

—— 2014b 「ウズベキスタンにおけるバザールと生計戦略——カシュカダリヤ州北部、手織り物売買の事例から」 『文化人類学』 79(1), pp. 1–24. [online] <<https://doi.org/10.14890/>>

jjcanth.79.1_1>.

- 2015a 「ウズベキスタンのバザールにどう人びと」『季刊民族学』39(4), pp. 87–99.
- 2015b 「手織り物からみる女性の日常生活——ウズベキスタン牧畜地域の事例から」京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(未出版博士論文).
- 2017 「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場について——ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働」『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族1』(CIRAS Discussion Paper 69) pp. 14–24. [online] <<http://hdl.handle.net/2433/228856>>.
- 2019 「ソ連期ウズベキスタンにおける社会主義的近代化と女性——『シャフリサブズ「フジウム」芸術製品工場』の労働者の事例から」『日本中央アジア学会報』15, pp. 1–22.

c. 翻訳文献

- ウェルズ, スペンサー 2007 『アダムの旅——Y染色体がたどった大いなる旅路』(和泉裕子訳) バジリコ.
- カルピニ, ルブルク 1965 『中央アジア・蒙古旅行記』(護雅夫訳) 桃源社.
- ポーロ, マルコ 1970 『東方見聞録』(愛宕松男訳注) 平凡社.

ii) 外国語文献

ロシア語

a. 単行本

- Bogolyubov, A. A. 1908–09. *Kovrovye izdeliya Srednei Azii*, vols. 1–2. St. Peterburg: Ekspeditsiya zagotov. gos. bumag.
- Burdukov, N. 1904. *Ukazatel' po kovram, vystavlenym na istoricheskoi vystavke v Muzei uchlishcha barona Shtiglitsa*. St. Peterburg: [s.n.].
- Davydova, S. A., E. O. Sviderskaya, K. G. Berens, E. N. Polovtsova. 1913. *Kustarnaya promyshlennost' Rossii: Zhenskiiye promysly*. St. Peterburg: Tipo-lit. “Yakor’.” [online] <<https://www.prilib.ru/item/425782>>.
- Emel'yanenko, T. G. (ed.). 2021. *Otchet S. M. Dudina o poezdakh v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg.* Moskva: Fond Mardzhani.
- Fakhretdinova, D. A. 1988. *Yuvelirnoe iskusstvo Uzbekistana*. Tashkent: Izd-vo lit-ry i iskusstva im. Gafira Gulyama.
- Fel'kerzam, A. E. 1915. *Starinnye kovry Srednei Azii*. Petrograd: Ezhemesyachnik “Starye gody.”
- Gyul', E. F. 2005. *Dialog kul'tur v iskusstve Uzbekistana (antichnost', Srednevekov'e)*. Tashkent: PRINT-S & Mir INFORM.
- . 2019. *Kovry Uzbekistana: Istoriya, estetika, semantika*. Tashkent: Art Flex.
- Karmysheva, B. Kh. 1954. *Uzbeki-lokaitsy Yuzhnogo Tadzhikistana*. Dushanbe: Izdo-vo Akad. nauk Tadzh. SSR.
- . 1969. *Etnograficheskie ocherki uzbekskogo sel'skogo naseleniya*. Moskva: Izd-vo “Nauka.”
- . 1976. *Ocherki etnicheskoi istorii yuzhnykh raionov Tadzhikistana i Uzbekistana: po etnograficheskim dannym*. Moskva: Izd-vo «Nauka».
- Moshkova, V. G. 1970. *Kovry narodov Srednei Azii kontsa 19 - nachala 20 vv.* Tashkent: Izdatel'stvo

“FAN” UzSSR.

Semenov, A. A. 1925. *Bibliograficheskii ukazatel' literatury po kovpovym tkanyam Azii*. Tashkent: Uzgosizdat.

Simakov, N. E. 1883. *Iskusstvo Srednei Azii: Sb. sredne-azizt. ornamentatsii, ispolnenyi s natury*. St. Peterburg: O-vo pooshshpeniya khudozhestv.

b. 論文

Andreev, M. S. 1924. “Nekotorye rezul'taty etnograficheskoi ekspeditsii v Samarkandskuyu oblast' v 1921 g.,” *ITORGO* 17, pp. 121–140.

Dudin, S. M. 1928. “Kovrovye izdeliya Srednei Azii,” *Sbornik Muzeya antropologii i etnografii* 7, pp. 71–166. [online] <<http://raretes.ru/biblioteka/dudin-kovrovye-izdeliya-sredney-azii/>>.

Gavrilov, M. F. 1927. “Tkatskoe iskusstvo uzbekskoi zhenshchiny s. Milyabad,” *Narodnoe khozyaistvo Srednei Azii* 1–2, pp. 46–54.

Gyul', E. F. 2001. “Dzhoinamaz: edinstvo simvola i pituala,” *San'at* 3, p. 15. Tashkent. [online] <https://sanat.orexca.com/2001-rus/2001-3-2/history_art4-2/>.

———. 2008. “Traditsii koloristiki v khudozhestvennom tekstile Uzbekistana,” *Sanat* 3–4, p. 23. [online] <https://sanat.orexca.com/2008-rus/2008-3-2/elmira_gyul/>.

Karmysheva, B. Kh. 1955. “Lokaiskie napramach i ilgichi,” *Soobshcheniya Respublikanskogo istoriko-kraevedcheskogo muzeya* (Istoriya i etnografiya 2), Stalinabad: [s. n.], p. 196.

———. 1960. “Etnograficheskaya gruppa «tyurk» v sostave uzbekov,” *Sovetskaya etnografiya* 1960(1), pp. 3–22.

Moshkova, V. G. 1946. “Plemennye goli v turkmenskikh kovraxh,” *Sovetskaya etnografiya*, 1946(1), pp. 145–162.

———. 1951. “Dzhul'khipsy: Dva unikal'nykh uzbekskikh kovra XIX v. iz sobraniya Muzeya istorii AN UzSSR,” *Trudy Muzeya istorii narodov Uzbekistana* 1, pp. 27–32.

Semenov, A. A. 1911. “Kovry russkogo Turkeстана,” *Etnograficheskoe obozrenie* 88–89, pp. 1–43.

Tsareva, E. G. 2004. “Totemnye izobrazheniya na vorsovykh kovraxh Srednei Amudar'i,” in M. F. Kosarev, P. M. Kozhin & N. A. Dubova (eds.), *U istokov tsivilizatsii. Sb. statei k 75-letiyu Viktora Ivanovicha Sarianidi*, Moskva: Staryi sad, pp. 202–224. [online] <https://www.kunstkamera.ru/files/lib/978-5-88431-139-8/978-5-88431-139-8_06.pdf>.

———. 2006. “Voiloki Evrazii,” in *Kul'turoe nasledie narodov Tsentral'noi Azii, Kazakhstana i Kavkaza* (Sb. MAE 52), St. Peterburg: Nauka, pp. 226–265.

———. 2007. “«Psevdo-plemennye» kovry Srednei Amudar'i kak kul'turnyi tekst,” in Chistov, Yu. K. & E. A. Mikhailova (eds.), *Radlovskii sbornik: Nauchnye issledovaniya i muzeinye proekty MAE RAN v 2006 g.*, St. Peterburg: MAE RAN, pp. 41–44.

———. 2009. “Vorsovye kovry s syuzhetom l'va i tigra v Tsentral'no-Aziantskikh tkanyakh kushanskogo vremeni,” in M. A. Rodionov (ed.), *Aziatskii bestirii: Obrazy zhivotnykh v traditsiyakh Yuzhnoi, Yugo-zapadnoi i Tsentral'noi Azii*, St. Peterburg: MAERAN, pp. 75–86.

———. 2010a. “Drevneishie syuzhety na sovrennykh gladkotkanykh kovrovnykh izdeliyakh apabov Tsentral'noi Azii,” in Yu. K. Chistov & M. A. Rubtsova (eds.), *Radlovskii sbornik: Nauchnye*

- issledovaniya i muzeinye proekty MAE RAN v 2009 g.*, St. Peterburg: MAE RAN, pp.55–58.
- . 2010b. “Vorsovoe tkachestvo naseleniya Srednei Amudar’i kak forma adaptatsii k geograficheskim i istoricheskim osobennostyam regiona,” in N. A. Dubova (ed.), *Chelovek ego biologicheskaya i sotsial’naya istoriya: Trudy Mezhdunarodnoi konferentsii, posvyashchenoi 80-letiyu akademika RAN V. P. Alekseeva* (Chetvertye Alekseevskie chneniya 2), Moskva: Izd-vo ANOO VPO «Odintsovskii gumanitarnyi institut», pp. 230–234.
- . 2012. “Filikli: istorii uzelnogo tkachestva v Tsentral’noi Azii (po materialam Mesopotamii i Turkmenistana),” in V. I. Sarianidi, N. A. Dubova & P. M. Kozhin (eds.), *Trudy Margianskoi arkhologicheskoi ekspeditsii* (Issledovaniya Gonur Depe v 2008–2011 gg 4), Moskva: Staryi sad, pp. 240–249, table list 2, 9–11, 16–20. [online] <<https://lib.kunstkamera.ru/files/lib/978-5-88431-139-8/978-5-88431-139-8.pdf>>.
- . 2013a. “K istorii tekhniki i ikonografii nastennykh zanavesei «dzhigyich kiiz»,” *Vestnik Maikopskogo gosudarstvennogo tekhnologicheskogo universiteta* 4, Maikop: Izd-vo MGTU, pp. 23–31. [online] <<https://cyberleninka.ru/article/n/k-istorii-tehniki-i-ikonografii-nastennykh-zanavesey-dzhigyich-kiyiz>>.
- . 2013b. “Tsinovki v tekhnike «tvain» v kul’ture nomadov Severnoi Evrazii,” *Vestnik Maikopskogo gosudarstvennogo tekhnologicheskogo universiteta* 4, Maikop: Izd-vo MGTU, pp. 31–36. [online] <<https://cyberleninka.ru/article/n/tsinovki-v-tehnike-tvayn-v-kulture-nomadov-severnoy-evrazii>>.
- . 2015a. “Istoriya formirovaniya i rasprostpaneniya vorsovykh tekhnik (evpaziiskaya traditsiya),” in Yu. K. Chistov (ed.), *Radlovskii sbornik: Nauchnye issledovaniya i muzeinye proekty MAE RAN v 2014 g.*, St. Peterburg: MAE RAN (Ros. Akad. nauk, Muzei antropologii i etnografii im. Petra Velikogo (Kunstkamera)), pp. 67–81.
- . 2015b. “Kovrodelie apabov yuzhnyi raionov Uzbekistana: Konets 19 - nachalo 21 v. (po kolleksiyam MAE i REM),” *Obrazy i znaki v traditsiyakh Yuzhnoi i Yugo-zapadnoi Azii* (Srobnik MAE 61), St. Peterburg: MAE RAN, pp. 270–357.

c. 翻訳文献

- Carpini, P. 1957. *Istoria mongalov*. trans. N. P. Shastina, Moskva: Gos. izd-vo geograficheskoi literatury.
- Polo, M. 1955. *Kniga Marko Polo*. trans. I. P. Minaev, Moskva: Gos. izd-vo geograficheskoi literatury.
- Rubruk, V. 1957. *Puteshestvie v Vostochnye strany*. trans. N. P. Shastina, Moskva: Gos. izd-vo geograficheskoi literatury.

d. オンライン文献

- Gyul’, E. 2019 (13 Mar). *Kovry v Uzbekistane: istoriya i traditsii*. [online] <<https://www.caa-network.org/archives/16107>> (2021年8月28日最終閲覧).
- Postanovleniya Prezidenta Respubliki Uzbekistan No. PP-4759. 2020 (26 June). “O merakh po razvitiyu v respublike otrasli ruchnogo kovrotkachestva.” [online] <<https://lex.uz/ru/docs/4873609>> (2021年8月27日最終閲覧).

Sokpovichcha Uzbekistana v muzee imeni Lindena. [n.d.] *Kul'tupnoe Hasledie Uzbekistana*. [online]
 <<https://legacy.uz/sokrovishcha-uzbekistana-v-muzee-imeni-lindena/>> (2021年7月30日最終閲覧).

英語

a. 単行本

Harvey, J. 1997. *Traditional Textiles of Central Asia*. London: Thames & Hudson.

Landreau, A. N. & W. R. Pickering 1969. *From the Bosphorus to Samarkand: Flat-woven Rugs*.
 Washington: Textile Museum.

Parsons, R. D. 1983. *The Carpets of Afghanistan*. [s.l.]: Oriental Textile Press.

Spuhler, F. 2014. *Pre-Islamic Carpets and Textiles from Eastern Lands*. New York: Thames &
 Hudson.

Tsareva, E. 2016. *Central Asia Textile Art: Turkmen Carpets: The Neville Kingston Collection*.
 London: Hali Publications.

b. 論文

Gyul E. 2004. “Carpet Weaving,” *History and Traditional Culture of Boysun: Review of the Boysun
 Scientific Expedition 2*, Tashkent: The Fine Arts Scientific Research Institute of the Academy of
 Arts of Uzbekistan, pp. 3–18.

Sono, F. 2016. “Women, Marriage, and the Market Economy in Rural Uzbekistan: Cases from a
 Pastoral Area of Kashkadarya Province,” in C. Obiya (ed.), *Islam and Gender in Central Asia:
 Soviet Modernization and Today's Society* (CIAS Discussion Paper 63), Kyoto: Center for
 Integrated Area Studies, Kyoto University, pp. 40–49.

———. 2020. “How Local Handicrafts Enter the Global Tourism Market: A Case Study on a Carpet
 Business in Rural Uzbekistan,” *Japanese Review of Cultural Anthropology* 21(1), pp. 79–114.

c. 翻訳文献

Bogolyubov, A. A. 1973. *Carpets of Central Asia*. (trans. & ed.) J. M. A. Thompson. Wheathold
 Green: Crosby Press.

Kalter, J. & M. Pavaloi (eds.). 1997. *Heirs to the Silk Road: Uzbekistan*. London: Thames and
 Hudson.

Moshkova, V. G. 1996. *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX Centuries*. (trans.
 & eds.) G. W. O'Bannon & O. K. Amanova-Olsen. Tucson, Ariz.: G.W. O'Bannon.

Moshkova, V. G., A. S. Morozova & M. F. Gavrilov. 1996. “Chapter 7 Classification of Central Asian
 Rugs,” in V. G. Moshkova (ed.), *Carpets of the People of Central Asia of the Late XIX and XX
 Centuries*, Tucson, Ariz.: G.W. O'Bannon, pp. 42–55.

Pinner, R. & M. Franses (eds.). 1980. *Aspects of the Weaving and Decorative Arts of Central Asia*
 (Turkoman Studies 1). London: Oguz Press.

Simakoff, N. 1993. *Islamic Designs in Color*. New York: Dover Publications.

d. オンライン文献

- CIA. 2021 (24 Aug). “Uzbekistan,” *The World Fact Book*. [online] <<https://www.cia.gov/the-world-factbook/countries/uzbekistan/#people-and-society>> (2021年8月30日最終閲覧).
- Gyul, E. 2011 (5 Oct). “Julkhyrs: Minimalism Aesthetics in Steppe Art.” [online] <<https://www.jozan.net/julkhyrs-minimalism-aesthetics-in-steppe-art/>> (2021年7月30日最終閲覧).
- . 2011 (28 Dec). “The Napramach: An Acient Suitcase and Chest.” [online] <<https://www.jozan.net/the-napramach-an-ancient-suitcase-and-chest/>> (2021年7月30日最終閲覧).
- . 2012 (18 Feb). “Gajari Flatwoven Carpets and Textiles.” [online] <<https://www.jozan.net/gajari-flatwoven-carpets-and-textiles/>> (2021年7月30日最終閲覧).
- . n.d. “The Magic of the Woolen Threads in the Uzbek Carpets,” in *O‘zbekiston havo yo‘llari*. pp. 50–54. [online] <https://www.academia.edu/34347463/the_Magic_of_the_Woolen_Threads_in_the_Uzbek_Carpets> (2021年8月30日最終閲覧).

トルコ語

- Balpınar, B. 1982. *Kilim, cicim, zili, sumak: Türk düz dokuma yaygıları*. İstanbul: Eren Yayınları.
- [Togan], Ahmed Zeki Velidi. 1928. “Türkistan matbuatı,” *Türkiyat Mecmuası* Cilt 2, pp. 597–621.